

共通の課題について互いに学び合う

民間企業への就職、海外留学、青年海外協力隊、JICAプロジェクトなど、新しい挑戦のたびに生まれる疑問に向き合い続けてきた桑垣隆一さん。これまでの経験を生かして、今、防災対策や農村開発にジェンダーの視点を入れる活動に取り組んでいる。

大切なのは常に学び続ける姿勢

アメリカ留学中に農業と林業の面白さにめり込んだ私は、その後、青年海外協力隊に応募し、パラグアイで土壌肥料隊員として活動しました。開発途上国で農業に従事したいという理由で参加したのですが、そこで起きた出来事が私の行動を変えざるをきつかけとなりました。私の任務は、農業高校で土壌分析や肥料の作り方などを教えることでしたが、ある日、畑で育てていた野菜をもらいに10代の女性がやってきました。未婚で子持ち、かつ仕事で忙しくて教育を受けられないその女性を見て、研修の機会が与えられない人にこそ農業を教える仕組みが必要だと感じたのです。

そこで、イギリスの大学院で参加型開発について学び、ボリビア高地でのJICA事業に専門家として関わりました。農村開発を目的としたこの事業で意識したのは、全ての住民を巻き込むこと。NGOなどによる過去の支援では男性しか研修を受けていなかったため、女性に対しても洋裁や伝統織物を教えることにしました。ところが、ここでもある問題が。最貧層の女性たちは集落の女性グループのメンバーから排除されたため、研修に参加できなかったのです。

グループはどのように作られるのか——そのことに興味を持った私は、社会の組織や制度について大学院で研究し、今度はボリビア低地での農業に関するJICA事業で専門家を務めることになりました。無秩序に広がる焼き畑を水田に変えることにより米の収量は増えましたが、高地からの移住者は常に低地では生活していません。手間がかからない焼き畑を好みました。そこで、彼らには月に1回程度の剪定で済むカカオ栽培を教えることで、それぞれの生活スタイルに合った農業を提案しました。収入が向上したことで家を改築した女性もいましたし、ある女性から「日本に帰らないでほしい」と言われたときには、協力隊時代に感じた疑問に対する答えが少し見えた気がしました。

その国の制度に合った支援を

ボリビアでも取り組んできたジェンダーの視点をより幅広い分野の事業に取り入れたいと考え、昨年から、ジェンダー平等・貧困削減推進室の専門嘱託として働いています。私が担当する案件の一つが、各国の防災計画にジェンダーや多様性の視点を取り入れるための研修です。この研修の特長は、開催地である東北の参加者と海外の研修員が、お互いの課題や取り組みを共有し学び合うこと。東日本大震災では、自主防災組織の多くが男性のみで構成されていたため、災害時に女性だけが家に残っていた場合に避難の仕方が分からないという問題が浮き彫りになりました。また、日本に住む外国人の方に対して、行政はどのような支



社会基盤・平和構築部
ジェンダー平等・貧困削減推進室
専門嘱託

桑垣隆一

KUWAGAKI Ryuichi

証券会社勤務とアメリカへの留学を経験した後、2000年から約2年半、パラグアイで青年海外協力隊(土壌肥料隊員)として活動。その後、JICA専門家や大学院特任助教などを経て、昨年5月より現職。



タンザニアでは、ジェンダーをテーマにした研修で助言を行った

援ができるのか——日本も学ぶべきことはたくさんあるのです。

私たちは、研修で作成した活動計画が母国で推進されるためのフォローアップを行っています。例えば、スリランカでは研修後に行政担当者や教育関係者などを集めた会議を開いたところ、見知らぬ男性と行動を共にしてはいけないという宗教上の制約から、緊急援助隊の男性が駆け付けても女性が家から出てこないことがあったと明らかになりました。そこで、各集落に配置されている女性省のローカルスタッフが災害時の避難誘導を担うための研修を実施することが決まりました。ボリビアでも感じたことですが、支援を行う際には、人々の生活スタイルや行動規範といった広い意味での制度を理解することが大切なのです。

さまざまな経験の中で得た知見を生かして、社会の変化に対して常にアンテナを高く持ちながら、今後もJICAの事業に取り組んでいきたいと思っています。



ボリビアの農村開発プロジェクトの専門家を務めた桑垣さん。地元の女性グループのメンバーと共に